

桜

岡本かの子

青空文庫

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命いのちをかけてわが眺ながめたり

さくら花ばな咲きに咲きたり諸もろ立ちの棕しゆろ櫚しゆん春くわう 光くわうにかがやくかたへ

この山の樹きぎ樹ぎのごとと芽ぐみたり桜のつぼみ稍ややややにゆるむ

ひつそりと櫛け大き門たいもんとざしありひつそりと桜咲きてあるかも

丘の上の桜さく家いへの日あたりに啼なきむつみ居をる親豚子豚

ひともとの桜の幹みきにつながれし若駒わかごまの瞳めのうるめる愛かなし

淋しげに今年ことしの春も咲くものか一樹ひときは枯かれしその傍そばの桜

春さればさくらさきけり花蔭はなかげの淀よどの浮木ふぼくの苔こけも青めり

ひえびえと咲きたわみたる桜花はなのしたひえびえとせまる肉体の感
じ

散りかかり散りかかれども棕櫚の葉に散る桜花はなふぶき溜たまるとはせ
ず

ならば咲く桜の吹雪ふぶきほふらあの若芽わかめの枝の枝ごとにかかる

わが庭の桜日びより和の真昼なれ贈りこしこれのつやつや林檎りんご

青森の林檎の箱ゆつやつやと取り出いでてつきず桜花はなの樹このもと

林檎むく幅はばひろ広ひろないふまさやけく咲き満みてる桜花はなの影うつしたり

地震崩なみくづれそのままなれや石崖いしがきに枝垂しだれ桜は咲き枝垂れたり

しんしんと桜花さくらかこめる夜よるの家突とつとしてぴあの鳴りいでにけり

しんしんと桜花はなふかき奥おくにいつぽんの道みちとほりたりわれひとり行ゆ
く

せちに行けかし春は桜の樹下こしたみちかなしめりともせちに行けかし

さくら花はなひたすらめづる片かたごころ心こころせちに敵かたきをおもひつつあり

朝あさざくら討うたば討うたれむその時の臍ほぞかためけりこの朝あさのさくら

あだかたきうらみそねみの 畜ちくしやう生うが桜花さくら見てありとわれに驚く
 わが婢はしたなにおもふらむ廚くりやべ辺べの桜花はなの樹このもとにあちらむき停たて
 り

この朝あさの桜花はなの樹このもと小心よさくの与作よさくものつと歩み出でたり

わが幼稚をさなさひたはづかしし立ち優まさり咲そろき揃そろひたる春はる花はななれや

咲さきこもる桜花はなふところゆ一ひとひらの白刃しろはこぼれて夢さめにけり

わがころも夜具やぐに仕換しかへてつつましく搔かい寝いねてけり月夜夜つくよぎくら

角立つのちのみじかきからに牛うしの角つのつのだち行けどふれずさくらに

いみじくも枝垂しだるるさくら日ひの本もとの良子女王ながこによわうが素直なほきおん眉まゆ

可愛かあゆしといふわが言かの畏かしこけれ桜花さくら見ますかわが良子りよこひめ

新しき家居いへの門かどに桜花はな咲けど夜よを暗くみ提ちやう灯ちんつけて出いでけり

桜花はなさける道は暗くけど一いつしんに提灯ちやうてんふりて歩あみけるかも

わが持てる提灯の炎はとどかずて桜はただに闇に真白し

いつぽんの桜すずしく野に樹てりほかにいつぽんの樹もあらぬ野
に

桜ばな暗夜やみよに白くぼけてあり墨すみ一いつ色しきの藪やぶのほとりに

つぶらかにわが眼めを張はればつぶつぶに光こまかき朝桜かも

ひんがしの家の白かべに八重やへざくら淋漓りんりと花のかげうつしたり

さくら咲く丘のあなたの空の果て朝やけ雲の朱しゆを湛たへたり

わだつみの豊旗とよはたぐも雲のあかねいろ大和島根やまとしまねの春花はるはなに映はゆ

ひさかたの光のどけし桜ちるここの丘をかべ辺を過ぐる葬さうれつ列

ほそほそと雫しづくしだるる糸ざくら西洋婦人ぬ濡れてくぐるも

糸桜ほそき腕かひながひしひしとわが真額まひたへをむちうちにけり

わが家の遠つ代にひとり美しき娘ありしといふ雨夜夜ざくら

真玉なす桜花のしづくに白黒のんだら犬がぬれて停ちたり

折々にしづくしたたる桜花のかけ女靴のあとのとびとびに残る

ほそほそと桜花の奥より見えて来る灯にまさりたる淋しき灯なし

桜花の奥なにかからかに語り来る人ありて姿なかなか見えず

糸杉のみどり燃えたりそのかたへふわふわ桜咲き白むかも

桜さく丘にのぼれば遠かたの松ふく風の声かそかなり

この丘の桜花のもとゆ見はるかす遠松原のほのぼのしかも

松の間に桜さきたり松の葉の黒きひまよりうす紅ざくら

ミケロアンゼロの憂鬱はわれを去らずけり桜花の陰影は疲れて
ぞ見ゆれ

桜花あかりさす弥生こそわが部屋にそこはかとなく淀む憂鬱

かなしみがやがて黒める憂鬱となりて術なし桜花のしたみち

早春の風ひようひようとう吹きにけりかちかちに苔む桜並木を

かちかちにつぼむ桜の樹下みちしなび蜜柑を曳いて通るも

さくら咲くあかるき外には立ちにけりわが衣の皺にはかに著し

仁丹の広告灯が青くまた赤く照せり夜の桜ばな

さくらばぬきば
 桜花軒場に近し頬ほにあつるかみそりの冷えのうすらさびしき

山川のどよみの音のすさまじきどよみの傍そばのひとつもと一本桜

はな
 桜花さけど廚女房くりやいつしんに働きてあり釜かまひかる廚

裏庭のひよろひよろ桜てふずばの手ふき手ぬぐひ薄うすよご汚れたり

しんしんと家をめぐりて桜さくおぞけだちたり夜半よはにめざめて

けふ咲ける桜はわれに要えうあらじひとの嘘うそをばひたに数かずふる

さかんなる桜はわれになまぬるき「許しの心」あに教ふべしや

薄月夜うすづくよこよひひそかに海鳥うみどりがこの丘をかの花をついばみに来こむ

この丘に桜散る夜よなり黒玉ぬぼたまの海に白帆しらほはなに夢むらむ

夜よは夜とて闇をじこの小床あはほしに淡星と語らふものか小ざくら桜

こよひわきて桜花はなの上なる暗空やみぞらに光するどき星ひとつあり

ひとり見る山ざくらばな胃を病みてほろほろ苦き舌を含めり

ねむたげな桜並木を一声の汽笛の音がつつ走りけり

駅前の石炭の層にうらうらと桜花ちりかかる真昼なりけり

自動車の太輪の砂塵もうもうとたちけむりつつ道の辺の桜

真白なる鶏ひとつ今朝みれば血に染みてあり桜花の樹のもと

空高く桜咲けどもわがたどる一本の道は岩根ごごしき

さくらばな咲く春なれや偽りもまことも来よやともに眺めな
なが

日の本の春のあめつち豪華なる桜花の層をうちに築きたり
ひもと
がうくわ
さくら

おのづから蔭影こそやどれ咲き満てる桜花の層のこのもかのもに
かげ
み
さくら

にほやかにさくら描かむと春陽のもとぬばたまの墨をすり流した
か
はるひ
すみ
り

にほやかにさくら描きておみな子も金もうけむとおもひ立ちたり
ゑが
ご
かね

おみな子の金もうくるを笑はざれ日本のさくら震後の桜

日本の震後のさくらいかならむ色にさくやと待ちに待ちたり

金ほしきおみなとなりて眺ながむれど桜の色はかわらざりけり

金ほしき今年の春のおのれかもいやうるはしと桜をば見つ

このわれや金とり初そめの日ひの本もとの震後の桜はなの真盛りの今日けふ

停電の電車のうちゆつくづくみやこと都はなの桜花をながめたるかも

桜さく頃ともなればわきてわが疲るる日こそ数は多けれ

かろき疲れさくらさく椽えんにかりそめの綻ほころびもわがつくろはずけり

しばたたきうちしばたたき眼めを病やめるわれや桜をまともには見ず

さくら花はなまぼしけれどもやはらかに春のこころに咲きとほりたり

うつらうつらわが夢むらく遠方をちかたの水晶山に散るさくら花

うちわたす桜の長道ながてはるぼろとわがいのちをば放ちやりたり

外の面ともには桜盛さかるをわが瓶へいの室咲むろぎきの薔薇ばらははやもしぼめり

真黒くわれ動うござりあしたより桜花はなは窓辺まどべに散りに散れども

ひそかなる独ひとりごと言ことなれけふ聞きてあすは忘れよひとと桜

遠稻妻とほいなづまそらのいづこぞうちひそみこの夜桜よざくらのもだし愛かなしも

かきくもる大空のもとひそやかに息づきにつつこの丘の桜

かそかなる遠とほいかづち雷を感じつつひつそりと桜さき続きたり

なごやかに空くもりつつ咲き盛さかる桜を一日ひとひうち和なごめたり

り
気難きむづかしきこの家やの主人あるじむづかしき顔しつつさくら移植うつさせて居を

歌磨うたまろの遊女いうぢよの襟えりの小桜こざくらがわが傘からかさにとまり来にけり

政信まさのぶの遊女の袖そでに散るさくらいかなる風にかつ散りにけん

うたかたの流れの岸にひろしげ広重うつつが現はなの桜花はなを描かき重ねたり

咲き倦うみて白くふやけし桜花はなのいろ欠伸あくびかみつつわが見やりたり

みちばたのさくらの太根ふとね玉葱たまねぎを懇ねもころいだきわがいこひたり

ほろほろと桜ちれども玉葱はむつつりとしてももの言はずけり

何がなしかなしくなれりもの言はぬ玉葱に散り散り滑すべるさくら

ここに散る桜は白し玉葱の薄茶の皮ゆ青芽のぞけり
うすちや

春浅しここの丘辺の裸木の桜並木を歩みつつかなし
をかへ はだかぎ なみき あゆ

さくら木のその諸立ちのはだか木にこもらふ熱を感じざらめや
もろだ

松の葉の一葉一葉に濃やけく照る陽のひかり桜にも照る
ひとは こま

若竹のあさきみどりに山ざくら淡淡と咲きて添ひ樹てるかも
わかたけ あはあは

桜花ちりて腐れりぬかるみに黒く腐れる椿がほとり
さくらばな くさ つばき

地を撲ちて大輪つばき折折に落つるすなはち散り積むさくら

おほでら
大寺の庭に椿は敷き腐り木蓮の枝に散りかかる桜

ぼたん桜ここだく樹てり尼たちが紐かけ渡し白衣干すかも

鬱として曇天のしたに動かざり梢のさくら散り敷けるさくら

どんよりと曇天に一樹立つさくら散るとしもなく散る花のあり

一 天は墨すり流し満山の桜のいろは氣負ひたちたり

見渡せば河しも遠し河しもの瀬瀬にうつれる春花のかけ

急阪のいただき昏し濛濛と桜のふぶき吹きとざしたり

も さやさやと竹さやぐからに出でて見ればしんと桜が咲き居たるか

塔の沢のいかもの店に女唐停ちその向つ峰の桜花盛りなり

いかものを女唐買ひたりその女唐箱根の桜花はなの下みちを行く

わがままはやめなどぞおもへしかはあれ春さり来れば桜さきけり

桜花はなの山は淡墨うすずみいろに暮れにけり 大鳥おほがらす一羽ひつそり帰る

大暴風おほあらしうすずみ色の生壁なまかべにさくら許ここだ多くたたきつけたり

ここにして桜並木なみきはつきにけり遠浪とほなみの音かそかにはする

桜花はなの山はうしろに高し見はるかす淡墨いろのたそがれの海

いそがはしく吾^{われ}を育ててわが母や長閑^{のど}に桜も見で逝^ゆきませしか

ととせ
十年^{ととせ}まへの狂^{きやう}院^{ゐん}のさくら狂^{きちがひ}人のわれが見にける狂院のさく
ら

狂人のわれが見にける十年まへの真赤きさくら真黒きさくら

狂^{きちがひ}人^よ狂^{きちがひ}人^よとてはやされき桜^{さくら}花^や云^いひし人^{ひと}間^とや笑^{わら}ひし

ふたたびは見る春^な無^なけむ狂^{きちがひ}人^のわれに咲^さきけむ炎^{えん}の桜

わが夫つまよ十年ととせ昔せのきちがひのわが恐怖おそれたる桜花はなあらぬ春

ねむれねむれ子なよ汝なが母ながきちがひのむかし怖れし桜花はなあらぬ春

人間の交友まじわりのはてはみな儂はかな桜見はなつつし行きがてぬかなし

(来よと宣のらせる佐藤春夫氏のに厚く謝しつつ)
 桜花はなあかり廚くりやにさせば生なまざかな魚鉢はちに三さぼん冴さえひかりたり

生なまざかな光りて飛べりうす紅べにの桜の肌はだの澄すみの冷たさ

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第八卷」冬樹社

1976（昭和51）年4月15日初版第1刷発行

初出：「中央公論」

1924（大正13）年4月号

※「椽《えん》」の表記について、底本は、原文を尊重したとして
います。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年2月17日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桜

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>